

國使用餘の古船を買ひ或ハ託して新調するも我ハ修船場無き以上ハ一たび壞れハ忽用を爲せ能ハせ又壞船の度毎ハ外國へ運航する時を往返費用計りも格外の事あれば斷然良工を迎へ近港よて然る可き場所を撰ハせ取建る事ハ決定すへと極りたれば然らハ何の國ありとも其然る可きを撰まんと議したるハ海外各國皆我ハ師あれば餘國ハ榮傲不遜よて我を恐嚇し其不馴を欺き飽迄利を貪らんとするのみあれば唯佛國ハ巽順ふて佗ハ比せれば其説も稍信を取るハ足れハ矢張佛國ハ委託する様爲せへと予猶其巨費の如何を憚りたれば熟々子細商量あられよ今ハ於而ハ爲も爲さるも我ハ在り既ハ託せし後ハ復如何ともすへからすと云へハ上野笑て當時の經濟ハ眞ハ所謂遣

り繰り身上ふて假令此事を起さるも其財を移して他ニ供せらる如きハあらば故ハ是非無かる可らさるの「ドック」修船所を取立るとあらハ却而他の冗費を節する口實を得るの益あり又愈出來の上ハ旗號ハ熨斗を染出とも猶土藏附賣家の榮譽を残せ可し（上野ハ此語を一時の諧謔ハあらば實ハ無限の憐むべき者あり中心既ハ政府の最早久存せる能ハざるを十分ハ判する久しければ其存せるの間ハ一日も政府の任を盡さる可らさるハ注意せし者ふて熟友晤言の間常ハ此口氣を離れざりき）夫より佐賀献納器械の長崎ハ残りたる分も盡く横濱ハ取寄せシンソライの取調を経て錆腐の分手入磨き立一ト通り組立て試ミし上同港太田川縁沼地を埋立て建築する事ニ至り予ハ部下ふてハ

杉浦精介(今赤城と改名)軍艦方よりハ誰ありーや名を記セ
以通詞ハ北村元四郎(今名村泰藏)等を掛役とあり佛人シン
ソライ同ドロートル同エーデの輩其餘も共ニ横濱小製鐵
所の建築ニ從事せしめ固より大事業あるを以て内ニハ閣
老水野和泉守參政酒井飛驒守ヲ命を以て佛公使同水師提
督と議し其推撰を以て同國蒸氣學士ウエルニ―ヲ上海ヨ
リ召寄せ追々談判を遂げるの末終ニ同人を傭ひ惣裁とし
相州横須賀灣ニ於て彼國地中海ニ在るツ―ロン製鐵所の
式ニ依り其規模を三分の二ニ縮め製鐵所一ヶ所「ドック」大
小二ヶ所造船場三ヶ所武庫廠解共ニ全四年ふして成功し
其費用ハ凡一年六拾万弗四年惣計二百四十万弗を用ゆ可
きを約し於是大日本帝國ニ於て始て造船製鐵船渠の大事

業を起したりー此時東洋各國中支那の大ニ雖も猶未ニ有
らざる所ありと云へり

海軍歷史卷之二十二

